二〇二五年一〇月一一日

秋の蚊に食はれるもしたる異人館　む　べ
電線に引つ掛かりたる今日の月　よし女
新米や卵ひとつでこと足りぬ　澄　子
風の吹くたびに傾く案山子かな　よし女
身に入むや平家破れし一の谷　千　鶴
海苔粗朶の海にたゆたふ小舟かな　せいじ
吹き溜まる敦盛塚の落葉かな　む　べ
秋風や海一望の異人館　こすもす
秋入日一すじ白き水平線　なつき
白日傘白砂の浜をたもとほり　澄　子

二〇二五年一〇月一〇日

坂がかる須磨離宮道松涼し　む　べ
秀を競ふ三本杉や秋高し　うつぎ
玻璃窓を額縁として庭紅葉　山　椒
突堤を洗ひやまずよ秋の汐　せいじ

二〇二五年一〇月九日

須磨の秋句碑から句碑へ巡拝す　千　鶴
新幹線車窓はいまし刈田原　澄　子
部屋に満つ良夜のひかり独り占め　よし女
秋日影濃く射す須磨の師弟句碑　千　鶴
須磨夕焼け縮緬波を薔薇色に　む　べ
縮緬波きらめく須磨の秋日和　みきえ
存問の如し窓辺の月明かり　よし女
秋風が海から通ふ蕪村句碑　なつき
秋草を敦盛塚へ手向けけり　む　べ

二〇二五年一〇月八日

秋澄むや高嶺越えゆく雲の影　明日香
背高もものかは一気草刈機　せいじ
秋の日の光と影や禅の庭　もとこ
富士さやか車窓に裾野引きつけて　澄　子
蒼穹へ富士の山容さやかなり　む　べ
朝日いまさざ波となる芒原　ほたる
一の谷奈落を覆ふ葛畳　む　べ

二〇二五年一〇月七日

燈火親し栄枯盛衰物語　む　べ

二〇二五年一〇月六日

水鏡幾何模様なす枯蓮　みきお
自家製の団子持ち寄り月の宴　む　べ
しとどなる松葉の先の露雫　康　子
小鳥来てをるらしき声朝戸繰る　こすもす
物思ふやに腰まがる案山子翁　よし女

二〇二五年一〇月五日

堆く積まれし薪や秋山家　澄　子

毎日句会みのる選・二〇二五年一〇月一四日